以身伝しんぶん

展覧会ボランティア研修に参加

ボランティア研修の様子

9月21日と23日、展覧会「以身伝心」に参加するボランティアスタッフに向けた研修会が開催された。スタッフの中には、記者クラブの活動と兼ねているメンバーもいる。

記者レポート

9月21日（金）午後3時、奥村家住宅にて、ボランティアスタッフの事前研修が開催された。30名のボランティアが参加した。私もスタッフの一人として、この研修会に参加した。

初めに、担当者の方が、冊子の活動マニュアルにそって、開催時の活動の内容や注意事項を説明された。そして引き続き、学芸員の方が、展覧会の全体像を説明し、身体をテーマに開催した展覧会の意図を話された。

個々に展示された作品を鑑賞しながら、出展作家の経歴や創作背景も丁寧に解説されていった。

展覧会は、だれもが楽しめる展覧会づくりをめざし、五感を通して、鑑賞体験が深まることを念頭に企画された。

会場内の点字による作品や作家の紹介や音声コンテンツという音声を媒介した方法や、直接作品に触れることが可能な作品も展示されている。細心の注意を払って、たくさんの工夫が会場内でなされている。「心をもって、心を伝える。身体を通して、心を伝える。」学芸員の方の肉声のことばが、今も心に響いてくる。どの方にも楽しんで頂けるように、学芸員の方のメッセージを刻みながら、ボランティアをさせていただきたく思った。

9月23日(日)今回の展覧会の会場のひとつである奥村邸で、2回目のボランティアスタッフ研修会が、26名の参加のもと行われました。

1回目は9月21日（金）に行われています。今回の展覧会には、総勢50名のボランティアスタッフが応募されています。皆様、いずれかの日程で事前研修会に参加されました。ボランティアスタッフは奥村邸の前庭でNO-MAスタッフから今回の展覧会の「基本業務と作品紹介のレクチャー」について説明を受けました。今回の展覧会では、視覚障害のある方も楽しんでいただけるコンテンツを導入されています。

視覚障害のある方が来場された時の誘導方法や作品に触れておられる際の説明等、NO-MAスタッフによる実演も交えて細かい説明が行われました。その後、展覧会が行われている2つの会場に移動し、出展者の紹介と作品の紹介の説明が行われました。ボランティアスタッフの方々からは、出展されている作品に感動や驚きの声が上がり、会場はなごやかな雰囲気に包まれていました。

（記者　久保）

9月23日の午後、当展「以“身”伝心からだから、はじめてみる」第2会場の奥村家住宅にて、第2回「ボランティアスタッフ事前研修」が行われた。ボーダレス・アートミュージアムNO-MAは2004年から開館し、数々の展覧会を行ってきた。2014年には周辺地域の町屋を舞台にし、複数会場で開催された展覧会「アール・ブリュット☆アート☆日本」が行われたが、これをきっかけに多くのボランティアスタッフが参加するようになったという。

研修会では、出品されている作品やその作者について、また来場者への対応や運営上の注意点などが確認された。本展では視覚だけに頼らない様々な楽しみ方が提供されている。そのため、ボランティアは、目の見えない方への会場案内方法も学んでいた。NO-MAのスタッフからは、より多くの来場者に本展を楽しんでもらいたい、という意図が語られた。

ボランティアは総勢63人。県内外から様々な世代、様々なバックグラウンドを持った方が参加する。中には親子での参加、障害のある方なども。来館した際、時間のある方はボランティアとのおしゃべりも楽しむのもいいかもしれない。

（記者　相馬）

作者の草彌さんも来館

2階に上がると、窓に向かって置かれた机に向かい、ペンを忙しく上下に動かす男の子。小学校の低学年ほどだろうか。机に置かれた白い紙にどんどんと小さな、しかし一つとして同じでない点々が広がっていく。少しして「これ、疲れる～。」となめ後ろから眺めていた私に一言漏らしペンの持ち手を変え、また点々を生み出していった。これは出展者の一人である、草彌陵太さんの制作活動体験コーナーでの風景。指に伝わる振動と、それから生み出される音と色の広がりをただ純粋に楽しんでいたその男の子に、作者本人の姿がだぶって見えたような気がした。同じ階には本作者の作品と、その制作風景を映した映像が。また、作品から着想を得て制作された約10分間のオリジナルストーリーを鑑賞できるスペースもある。視覚だけではない作品の楽しみ方を、ぜひ体験してみてはいかがだろうか。

（記者　相馬）

創作体験コーナーでの草彌さん

体験コーナーで草彌作品制作を体感

NO-MAの2階の作品の出展者、草彌陵太さんがご来場されました。さっそく体験スペースで絵を描かれました。1階まで紙にペンを打ち付ける“パンパン”という軽快な音が聞こえます。30色ペンを次々と使い描いていかれます。

「いつもはこんなに沢山の色は使わないのに」とお母様。ほぼ30色使い「終わり」の一言で終了。カラフルな作品ができました。今日はアームカバーをされていないので、腕にインクが着いてしまったのを皆に見せてくれました。とてもチャーミングな方です。製作の時の音は2階奥の部屋で流れるオリジナルストーリー「ちょうどその時」の中で聴くことができます。

（記者　羽者家）

車イス？

並べられたこれらは一般的な「車イス」ではない。確かに、背もたれが平坦でなく、それぞれ違う形で一部ぽこっと隆起し、また凹んでいる。その凹みの奥行きや広がりもさまざま。どうやって座るのか。これは「横たわる生活」であった、自力で姿勢を保つことが困難な方が、起き上がり、「座る」姿勢を保持するための装置。福島の森田寅さんが、使用者一人ひとりの“身体”を想い、制作した。使用者を包み込み、支える背もたれ。凸と凹みの印影は、使用者の身体の形そのもの。眺めるうち、その人の姿が浮かんで見えてくるようである。ふいに、小学生くらいの子が、ひょいと座ってみせた。「どうやって…？」と考えていた大人たちが、「自分も触って、座ってみればいい」と、以“身”伝心のテーマに立ち返った瞬間だった。

（記者　辻純）

ボーダレス・エリア記者クラブInstagram更新中